

入選 愛知県 前田 楓 様 (高校生)

私はこの夏、ある研修を受けました。それは介護職員初任者研修という介護の登竜門的資格です。その研修の講義の中で、大学教授の先生が仰った言葉に深く共感しました。

「私は、年金を頂いてここまで生きてきました。私の母は元来、視覚と聴覚両方に障害がありながらも子ども5人を育ててきました。もちろん、当時の時代柄もありましたが、母は働けず、父の収入だけが頼りでした。ですが、ある時、父が結核を患い家庭の収入が途絶えた時、家族は危機に陥りました。それでも、家族全員が生きてこられたのは母の障害年金があったからです。私は今、年金を納める時は、誰かの生活に役立てばと考えています。それが私が幼少期に助けてもらったことへの恩返しとなれば、よいのです。」私はこの言葉を受けて、「ああ、そうだよな。年金はこういう人達にもあるべきだよな。」と思いました。私は、高校で年金についての授業の時、「まだ、先のこと。」と思っていた自分に年金の制度や仕組みを知ること身近なことなんだと実感することがありました。どうしても、年金と聞くと、高齢者のイメージが強く、私たちには関係ないと思っていました。仕組みを知れば知るほど、私たちも何年か後には、納付義務が発生したり、受け取れる機会がおとずれたりするかもしれないと学びました。そのような授業での経験から、先生の言葉に深く感銘を受けたのです。

私は昨年、夏休みの課題の為に新聞を読んでいた時、一組のひとり親家庭にショックを受けました。それは、年金の制度を知らずに受け取れるチャンスを逃していたというものです。年金の制度を知っていれば、僅かなお金でも貰えていたら、子ども達に貧しい思いをさせなかったと嘆くお母さんのコメントに心を痛めました。知らないことで、損を受けるのは自分自身であり、知っていることで、得を受けるのも自分自身です。これは年金に限った話ではないですが、今はまだ、現実味がなくても知っていればいつか救われるものになるかもしれないと思います。私は、年金は相互扶助の考えのもと、広く国民にいきわたるべきものだと思います。納付の時がきたら、保険料をきちんと払い、誰かの為に運用していけば、よりよい年金体制ができると思います。そうした、社会の基盤を作っていくことが、困窮世帯を助けることに繋がると思います。

私たちは若くても、身近な人が亡くなり、遺族年金を受け取る時がきたり、病気や障害を負ったりして、障害年金を受け取る時が、早くに来るかもしれません。その時に、年金を受け取れるチャンスを逃さない為にも、今、年金について知ろうとすることが大切だと思います。私は将来、社会福祉士として働いていきたいと思っています。それは、ハンデや困り事を抱えた人を少しでも多く助けていきたいと思ったからです。仕事の中でも、年金によって救える人がいるならば、より年金の制度について勉強していきたいと思っています。